

博士学位論文審査要旨

2012年12月14日

論文題目： 不安障害に対する脱フュージョンの効果—作用メカニズムと効果測定法の検討—

学位申請者： 木下 奈緒子

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 武藤 崇

副査： 心理学研究科 准教授 畑 敏道

副査： 立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授 谷 晋二

要旨：

本論文は、不安障害に特徴的にみられる回避行動の拡大に対する新たな援助技法（defusion；脱フュージョン）の効果機序に関する基礎的な検討および当該の効果測定法（implicit relational assessment procedure; IRAP）の開発を行ったものであり、7つの研究と6章から構成されている。第1章では、まず不安障害に対する心理療法的アプローチの研究動向が展望された。次に、その展望から、不安障害に特徴的にみられる回避反応の拡大が、言語過程に含まれる派生的な刺激関係およびその刺激機能の転移・変換に起因することが想定され、その要因に対する援助技法の洗練が必要であることが提起された。第2章では、その問題提起をうけて、本論文の目的が、当該の援助技法に対する洗練に必要な「作用機序の基礎実験的な検討」と「効果測定法の開発に必要な基礎実験的な検討」であることが明示された。第3章は「作用機序の基礎実験的な検討」に関する内容であり、研究1～研究3で構成された。第4章は「援助技法の効果測定法の開発に必要な基礎実験的な検討」に関する内容であり、研究4～研究6で構成された。第5章では、第3章と第4章から導き出された知見の実際の応用に関する内容であり、研究7で構成された。第6章は、研究1～研究7の知見が総合的に考察され、さらなる課題が提起された。

研究1および研究2では、刺激機能の変換は強固な現象であり、刺激の物理的特徴にもとづく刺激機能の変換が示されるには、複数の範例による訓練が重要であることが明らかとなった。また、そのような文脈制御が新奇刺激にも般化するには、特定の状況における個々の刺激への反応パターンの学習ではなく、それらの刺激に共通する刺激特性を学習すること（抽象化）が重要となることが示唆された。研究3では、刺激の物理的特徴にもとづく刺激機能の変換に対する文脈制御が安定して示されるには、複数の弁別刺激を用いた訓練が重要であることが示唆された。つまり、回避行動を誘発するさまざまな私的事象を対象として、それらの共通特性を抽象化できるよう反復的に訓練を行うことで、新奇場面においても脱フュージョン技法の効果が維持される可能性が高いことが示唆された。

研究4では、これまでのIRAPの研究で用いられてきた課題と同様に、不安IRAPも一定の信頼性と妥当性を有する指標であることが示された。研究5では、脱フュージョン技法の効果指標として、不安IRAPの反応潜時の有用性が示唆された。研究6では、安定した測定値を得るためには、不安IRAPを実施する前に、課題自体への慣れを促進することを目的とした練習IRAPを実施することが有用であることが示された。

研究7では、研究1～研究3の知見を踏まえた、私的（内的）事象の共通特性の抽象化を促進する介入手続きが、従来型の脱フュージョン技法の効果を増幅する可能性が示唆された。

以上より、脱フュージョン技法の作用機序の1つの側面が明確にされ、その技法の効果を測定する新しい技術（IRAP）の実用可能性を高めたことは、基礎実験と臨床的応用との具体的な連関の好例として高く評価できる。

よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2012年12月14日

論文題目： 不安障害に対する脱フュージョンの効果—作用メカニズムと効果測定法の検討—

学位申請者： 木下 奈緒子

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 武藤 崇

副査： 心理学研究科 准教授 畑 敏道

副査： 立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授 谷 晋二

要 旨：

上記審査委員3名は、2012年12月14日午後6時から約2時間にわたり、学位申請者に対して面接諮問を実施した。提出された論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的な価値が確認された。また、当該申請者は、臨床心理学はもとより、心理学全般にわたる専門的な知識を十分に有することが確認された。また、引き続き実施された語学試験（英語）についても十分な学力を有することが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 不安障害に対する脱フュージョンの効果—作用メカニズムと効果測定法の検討—

氏名： 木下 奈緒子

要旨：

認知的フュージョンとは、個人の反応が環境事象よりも、言語事象に支配的に導かれている状態を指す。一方、脱フュージョンの技法とは、アクセプタンス&コミットメント・セラピー（以下 ACT とする）において広く用いられる技法のセットであり、そのような問題となる言語事象と行動の関係性を変えることで、心理的柔軟性を高めることを目指すものである（Bach & Moran, 2008）。脱フュージョンは、特に不安障害の治療において、エクスポージャー技法などの従来の行動理論にもとづく治療技法の効果を増幅することが期待されている（Dymond & Roche, 2009）。

その一方で、脱フュージョンの技法の効果を支持する実証的エビデンスは限られており（Healy et al., 2008）、科学的な心理療法的技法としてのエビデンスは、未だ十分ではないことが指摘されている（Blackledge, 2007）。ACT は、人間の言語や認知に対する行動分析的アプローチを提供する関係フレーム理論（以下 RFT とする）の基本原則を基盤とする心理療法である（Hayes et al, 2006）。脱フュージョンの研究においても、その特徴や効果に関する基礎研究を統制された実験室の中で実施していくことが必要であると指摘されている。しかしながら、これまで脱フュージョンの作用機序の記述を目的とした基礎研究はほとんど実施されていない（Blackledge, 2007）。また、特定の脱フュージョンの技法の効果に焦点を当てたアナログ研究はいくつか発表されているが、介入効果に関する知見は必ずしも一貫していない（e.g., Healy et al., 2008 ; Masuda et al. 2010）。その背景には、従来の自己報告式のアセスメントでは、私的事象の機能的側面を直接的に測定するのは困難であるという問題がある（Masuda et al., 2010）。そのため、脱フュージョンの行動指標や客観指標の開発の必要性が指摘されている（Hesser et al., 2009）。そこで、本研究では、RFT の観点から脱フュージョンの作用機序を明らかにし、脱フュージョンの促進要因を検討すること、さらに、そのような脱フュージョンの治療的变化を適切にアセスメントする方法論を確立することを目的として7つの研究を実施した。

研究1・研究2・研究3は、脱フュージョンの作用機序の解明に関する基礎研究で構成された。RFT によれば、脱フュージョンとは、字義性の文脈にかわる新たな文脈のもとで、少なくとも一時的に言語プロセスにもとづく刺激機能の変換が制御されている状態である（Blackledge, 2007）。この刺激機能の変換に対する文脈制御の観点から、脱フュージョンの作用機序を記述する場合、脱フュージョンの技法は、もともとの思考内容が保持されていても、臨床的に問題となる回避行動が示されなくなるという刺激機能の変容を目指すものであるという点が重要となる。すなわち、問題とされている回避行動の随伴性内に、新たな物理的な文脈手がかりを導入するのではなく、脱フュージョンの技法を通して、介入対象となる刺激（思考）そのものに内在している刺激特性を文脈手がかりとして確立することで機能変容を目指すのである。そこで、本研究では、刺激に内在する刺激特性として、刺激の物理的特徴に焦点を当て、刺激の物理的特徴にもとづく、刺激機能の変換に対する文脈制御の獲得について検証し、脱フュージョンの促進要因について RFT の観点から検討した。

その結果、研究1および研究2では、刺激機能の変換は強固な現象であり、刺激の物理的特徴にもとづく刺激機能の変換が示されるには、複数の範例による訓練が重要であることが明らかと

なった。そして、そのような文脈制御が新奇刺激にも般化するには、特定の状況における個々の刺激への反応パターンの学習ではなく、それらの刺激に共通する刺激特性を学習すること（抽象化）が重要となることが示唆された。また研究3の結果から、刺激の物理的特徴にもとづく刺激機能の変換に対する文脈制御が安定して示されるには、複数の弁別刺激を用いた訓練が重要であることが示唆された。つまり、回避行動を誘発するさまざまな私的事象を対象として、繰り返しの訓練を行い、それらの共通特性を抽象化できるよう働きかけることで、新奇場面においても脱フュージョンの技法の効果が維持される可能性が高いことが示唆された。

研究3・研究4・研究5は、脱フュージョンの効果測定法の開発を目的とした基礎研究で構成された。近年、ACTの効果検証に関する研究において、さまざまな行動指標を用いた研究が発展しつつある。中でも、Implicit Relational Assessment Procedure（以下IRAPとする）は、人間の言語や認知をアセスメントする非内省的な方法論として、ACTと同様に、RFTを基盤として、行動分析学の枠組みの中で開発され発展してきた課題である（大月・木下，2011）。IRAPは、コンピュータ課題であり、実験参加者にラベル刺激とターゲット刺激の関係性について反応を求めることで、特定の信念を支持したり、否定したりすることを求める課題である（Power et al., 2009）。IRAPの課題の特徴の1つは、一致試行と不一致試行と呼ばれる2つの条件が設定され、実験参加者は、この2つの条件に交互に取り組む必要があるという点である。一致試行では、実験参加者は、これまでの学習歴によって形成された日常の言語関係にしたがい、回答を選択することが求められる。一方、不一致試行における反応とは、現在の文脈における、直接的な随伴性によって実験的に形成される関係反応である。脱フュージョンの特徴とIRAPの特徴を合わせて考えると、脱フュージョンが示されている状態では、字義性の文脈による影響が低減され、直接的な随伴性への気づきが高まることから、直接的な随伴性による反応形成が求められる不一致試行において、反応潜時が短くなることが予想される。そこで、本研究では、不安関連の刺激語を用いた不安IRAPを作成し、脱フュージョンの行動的アセスメントとして、IRAPが応用可能であるかどうか検討した。

その結果、研究4では、これまでのIRAPの研究で用いられてきた課題と同様に、不安IRAPも一定の信頼性と妥当性を有する指標であることが示された。研究5では、脱フュージョンの効果指標として、不安IRAPの反応潜時の有用性が示唆された。脱フュージョンの技法の実施によって、介入後に、不安IRAPの一致試行および不一致試行の反応潜時が低減することが確認され、課題に対する実験参加者の反応の柔軟性が高まることが明らかとなった。特に、脱フュージョンの効果指標として、不一致試行における反応潜時が重要であることが示唆された。研究6では、安定した測定値を得るためには、不安IRAPを実施する前に、課題自体への慣れを促進することを目的とした練習IRAPを実施することが有用であることが示された。

一連の研究結果から、脱フュージョンの技法の効果の促進には、臨床上問題となる刺激（思考）に共通する刺激特性を学習させること（抽象化）が重要であることが示唆された。さらに、脱フュージョンの効果指標として、不安IRAPの反応潜時の有用性が示された。そこで、研究7では、これらの研究知見をふまえ、社会不安の高い大学生を対象として、脱フュージョンの技法の効果を検討した。効果検証にあたり、従来の脱フュージョンの技法の1つであるword repeatingを実施する条件に加えて、word repeatingを実施する前に、回避行動を誘発するさまざまな私的事象の共通特性の抽象化を促進する手続き実施する条件を設定した。介入効果のプロセス変数として、これまでの脱フュージョンの研究で用いられてきた自己報告式の確信度の指標と、本研究で作成した不安IRAPが用いられた。その結果、本研究で作成した私的事象の共通特性の抽象化を促進する介入手続きは、従来型の脱フュージョンの介入技法の効果を増幅する可能性が示唆された。また、ウィリングネスの増幅や回避行動の低減につながるような介入効果のプロセスを適切にとらえるためには、自己報告式の確信度の指標のみならず、不安IRAPを用いることが有用であることが示された。

本研究の結果から、脱フュージョンの促進要因の一側面が明らかとなり、脱フュージョンの技法を用いた介入における治療的变化をアセスメントする方法論が提案されたことは、本領域における今後のトランスレーショナル・リサーチの展開に有益な知見を提供すると考えられる。今後、臨床群を対象として、一連の研究で得られた知見の追試を行い、本研究で作成した新たな介入技法や効果測定法の臨床的有用性について、さらなる知見を構築することが必要である。